二〇二六年度

適性検査型　第一回　入学試験問題

適　性　検　査　Ⅰ（五十分）（全五ページ）

〈注意〉

一．試験開始の指示があるまで、この問題冊子・解答用紙を開けてはいけません。
二．解答用紙は二枚です。試験開始の指示と同時に、二枚の解答用紙に受験番号と氏名をそれぞれ書きなさい。
三．試験開始後、問題冊子がそろっていない、印刷がはっきりしないなどの不備があったら、手をあげて試験監督に知らせなさい。
四．解答はすべて解答用紙の指定されたところに書きなさい。
五．記述問題で字数制限がある場合は、句読点など記号も一字として数えなさい。
六．問題文は上下二段になっています。

東京純心女子中学校

問題は次のページからはじまります。

1

次の文章を読み、あとの問題に答えなさい。

（＊印のついている言葉には本文のあとに〔注〕があります。）

文章1

人間の幸福ということについて、考えさせられることが多い。＊心理療法家という職業の私のところに訪ねて来られる方は、何らかの意味で不幸な状態になっておられる。その不幸を逃れて何とか幸福になりたいという願いをもって来られる。あるいは、あまりに絶望の状態にあるので、幸福など考えられないのだが、だれかに無理に引っ張られて来られる。

そんな方とお会いして、そもそも「幸福」とはなんだろうと考えさせられる。病気の人は健康な人が幸福と思っている。お金のない人はお金をたくさん持っている人が幸福と思っている。あるいは社会的な地位が高ければ高いほど幸福の度合いも増えると思っている。しかし、果たしてそうだろうか。私のようにたくさんの人びとにお会いして、その本音を聞く機会を持つと、そんなに単純に考えられなくなってくる。たくさんのお金や、高い地位などのおかげで不幸になっている、と言いたい人もある。

考え、考えしながら、いろいろな人にお会いしていると、「幸福というのが、そんなに大切なのだろうか」とさえ思えてくる。ともかく、それは大切であるにしても、①幸福を第一と考えて努力するのは、あまりよくないようである。結果的に幸福になるのは、いいとしても、はじめから幸福を狙うと、かえって的がはずれるようなところがある。「幸福」というのは、何だかイジの悪い人物のようで、こちらから熱心に接近していくと、上手に逃げられるようなところがある。要は、かけがえのない自分の人生を、いかに精一杯生きたかが問題で、それが幸福かどうかは二の次ではないか。あるいは一般に幸福と言われていることは、たいしたことではなく、自分自身にとって「幸福」と感じられるかどうかが問題なのだ。地位も名誉も金も何もなくても、心がけ次第で人間は幸福になれる。

確かにそのとおりである。時に自分は「地位も名誉も金もいらない」と＊公言される人があり、立派なことだと思う。立派なのはいいが、あまり大声で主張されると近所迷惑に感じられることもある。立派な上にもう少し静かだったらいいがと思ったりする。こんなあたりが、幸福ということの面白さである。地位も名誉も金も、あるのも悪くはないのである。

（河合 隼雄「しあわせ眼鏡」より）

〔注〕 心理療法家――心理的諸問題を抱(かか)える者の、認知・行動・感情・身体感覚に変化を起こさせ、症状(しょうじょう)や問題行動を消去(しょうきょ)軽減することをめざす、特定の訓練を積んだ専門家。

公言――公(おおやけ)に述べること。

文章2

ある国会議員から会いたいという連絡を受けた。＊政局の話かと思って伺ったら、「先生は死というものをどうお考えですか？」と質問された。政権交代の可能性についてあれこれ仮説を考えていたところに「そんなこと」を訊かれたので、びっくりしたが、「死」は私の＊念頭を去ったことのない主題であるので、思うところを述べた。

動物は自分がいつか死ぬということを考えない（訊いたわけではないから断言はできないが、たぶんそうだと思う）。人間は自分がいつか死ぬということを＊勘定に入れて生きている。子どもでもそうだ。私はそうだった。十歳くらいのとき、自分が死ぬことを考えると不安のあまり寝つけなかったことがしばらく続いた。だから、一人ひとりが「自分がいつか死ぬ」ことの耐え難さを＊緩和するために、それぞれの物語をつくることになる。私も一つ自前の物語を持っている。

私はもう＊古希を過ぎて久しい。歯はインプラントだし、膝には人工関節が入っている。狩猟民の昔だったら、食物も噛み切れないし、集団について歩くこともできない老人だから、とっくに＊路傍に捨てられて死んでいたはずである。

だから、私の今の状態は「生きている」というよりは「まだ死んでいない」という方が近い。だんだん死に始めているけれど、まだ死に切っていないというのが私の実感である。そのうち生物学的な死が訪れて、葬式も済み、「偲ぶ会」もにぎやかに行われ、＊遺稿集も編まれ、やがて知人友人たちもだんだん＊鬼籍に入る。そして＊法要の席で誰かが「みなさんももう＊お足がおぼつかないお年になられたので、どうでしょう、この十三回忌あたりで内田先生の法要も終わりにしようと思うのですが」と言い出して、みんな「そうだね」と頷く。それから後は古い門人や教え子がたまに墓の苔を掃いに来るだけで、私の名前を記憶している人もしだいにいなくなる。

そう考えるとだいたい生物学的に死ぬ十三年前くらいから「死に始め」、十三回忌あたりで「死に切る」という計算になる。つまり人間は前後27年かけてゆっくり死ぬ。というのが②私のつくった物語である。

こんな話なんですけれど、いかがでしょうかと言うと、かの国会議員も深く頷いて、「なるほど、そういう考え方もあるんですね」と納得されていたようである。「自分が死ぬことの耐え難さ」を緩和するためにはいろいろな物語があり得る。（中略）。その中でもすぐれたものに「＊黄泉の国」を旅する物語がある。＊村上春樹の長編小説の多くはある時期から主人公が「穴」に落ちて、「黄泉の国」を経巡ってから戻って来るという構造になっている。河合隼雄は村上春樹との対談で、「死後の世界」について想像力を行使するというのはとてもよい死への心がけだと述べている。「いろいろ方法はあるのだけれど、死後に行くはずのところを調べるなんてのはすごくいい方法ですね。だから、黄泉国へ行って、それを見てくるということを何度もやっていると、やがて自分もどこへ行ったらいいかとか、どう行くのかということがわかってくるでしょう。」（『村上春樹、河合隼雄に会いにいく』岩波書店１９９６年）

さすがに河合先生は言うことが違う。

（内田　樹『「死ぬ」とはどういうことか』より。

なお、本文には省略等があります。）

〔注〕

政局――政治の局面、重大事項の行く末。

念頭を去った――忘れ去った。

勘定――計算。

緩和――緩め和らげること。

古希――古来では希であった年齢という意味で、七十歳のこと。

路傍――道端。

遺稿集も編まれ――亡くなった後にそれまでの原稿をまとめた本も出版され。

鬼籍に入る――亡くなってゆく。

法要――亡くなった者を偲ぶ会。

お足がおぼつかない――歩けない。

十三回忌――十三回目の偲ぶ会。

黄泉の国――あの世の世界、死後の世界。

村上春樹――日本の小説家。

〔問題1〕 ①幸福を第一と考えて努力するのは、あまりよくないようである。とありますが、文章1の作者は、どのようにすることが良いと述べていますか。五十字以内で説明しなさい。
答えは一ますめから書き始めること。なお、、や。や「なども一ますに書き、それぞれ字数に数えます。

〔問題2〕 ②私のつくった物語とありますが、文章2の作者が物語を作ったのはどのような理由のためですか。本文中の言葉を使って、三十字以内で説明しなさい。
答えは一ますめから書き始めること。なお、、や。や「なども一ますに書き、それぞれ字数に数えます。

〔問題3〕 文章1と文章2の内容をふまえて、あなたは学校での活動や日常生活での活動に、どのように取り組もうと考えますか。三百字以上四百字以内で書きなさい。ただし、あとの〔手順〕と〔きまり〕にしたがうこと。

〔手順〕
1 文章1と文章2の両方の内容をふまえて、あなたが大切だと考えたことを、理由とともに書く。
2 〔手順〕1で書いたことが、学校での活動や日常生活での活動でいかせる場面を、具体的に書く。
3 〔手順〕2で書いた場面で、あなたはどのように取り組もうと考えるか、具体的に書く。

〔きまり〕
○題名は書きません。
○最初の行から書き始めます。
○各段落の最初の字は一字下げて書きます。
○行をかえるのは、段落をかえるときだけとします。
○、や 。や 」なども、それぞれ字数に数えます。これらの記号が行の先頭に来るときには、前の行の最後の字と同じますめに書きます。（ますめの下に書いてもかまいません。）
○。と 」が続く場合には、同じますめに書いてもかまいません。この場合、 。」で一字と数えます。
○段落をかえたときの残りのますめは、字数として数えます。
○最後の段落の残りのますめは、字数として数えません。